

我が青春のアルカディア 村高

2004 関東支部 同窓のつどい ご案内

2003のつどいから



16回生の美女達がお出迎え



ともに学んだ懐かしい仲間たち



13回生の面々も大挙参加

若葉の薫り香くわしく、色鮮やかな時節が今年もめぐってまいりました。

各位にはお健やかにてお越しのことと拝察申し上げます。

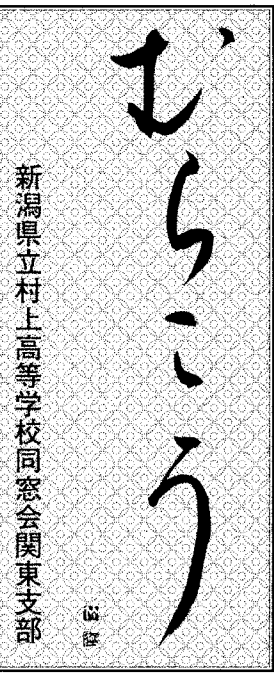
さて、今年も村上高等学校同窓会関東支部の総会および懇親会が、別掲の日程会場で開催されるはこびとなりましたので御案内申し上げます。

きのうも会った顔、一年ぶりの顔、数年あるいは数十年ぶりですぐには思い出せない顔などなど、懐かしい方々に会えるよい機会だと存じます。遠い昔の思い出話、近況の報告、健康の話、母校の現状等いろいろな会話をくりひろげながら、なごやかな雰囲気の中で楽しい一時を過ごしていただければと思います。

どうぞ旧友お互いにさそい合せて、是非ご出席くださるよう、お待ちしております。

なお、今年も昭和四十年卒業の新制十七回生の私達が実行委員会として、楽しい会となりますように微力を尽させていただきますので、よろしくお願いいたします。

新制十七回生 実行委員長 山本宏平
実行委員 一同



2004.5.15 第15号
発行人 本間勝治
題字 中山与志夫
事務局 神奈川県川崎市 麻生区向原3-5-5
☎ 044(953)8368

一、二年時は後藤孝先生、三年時は齋藤巽先生が担任。この頃の思い出といえば、クラス対抗のバスケット大会。180cm近い長身を利して活躍した。

中大卒業後は証券会社に入社。以後、定年を迎えるまで一貫して営業畑を歩む。高度成長期からバブル期、そして崩壊

村高在学は昭和二十九年〜三十二年。男女共学もほぼ定着、木造の旧校舎には質実剛健の気風に、女子生徒の華やいだ雰囲気も漂った。新制九回卒。

在学中は写真部に所属。部員達と階段下の暗室に籠り、現像に励んだ。

気にとめた風景や草花等の被写体が、画像になって現れる魅力にとりつかれたという。

昨年六月の総会で渡辺孝教さん(五回卒)からバトンタッチ、本年は会長として初の総会に臨む。

村高在学は昭和二十九年〜三十二年。男女共学もほぼ定着、木造の旧校舎には質実剛健の気風に、女子生徒の華やいだ雰囲気も漂った。新制九回卒。

在学中は写真部に所属。部員達と階段下の暗室に籠り、現像に励んだ。

気にとめた風景や草花等の被写体が、画像になって現れる魅力にとりつかれたという。



新会長に就任した 本間勝治さん

同窓会は出かけるの場
ふるつどいの参加を!

会費
・男女とも 八千円
・平成十二年〜十五年 四千円
・新卒者 無料

※会場準備の都合上、五月三十一日(月)迄に、同封の葉書により、必ずご出欠のご返事をお願い致します。

〇とき
平成十六年六月十九日(土)
受付開始 正午より
総会・懇親会開始 午後一時より
(途中からでもお気軽にどうぞ)

〇ところ
スクワール麹町
JR四ツ谷駅(麹町口) 正面
☎ 03-3333-4873

から今日にいたるまで、日本経済の浮沈を第一線で見てきた。証券金融問題のスペシャリストでもある。

趣味は古い寺社巡りや絵画鑑賞。暇をみては京都や奈良の寺社を訪れ、その建築美や創建の歴史ロマンに思いを馳せる。

また、絵画の展覧会にはよく足を運びかけても一六世紀オランダの画家、レンブラントの作品には強く惹かれるものが

村高―歴史への散歩道
その昔 岩船寮があった……

今から50年近く前、千葉県習志野市谷津町五丁目(京成谷津遊園駅(現在谷津駅) 近くの丘の上に岩船学生寮はありました。岩船寮がどのようにつくられたか、運営されたか、その歴史を、閉寮にあたって刊行された「寮誌」をわふね(鶴橋康夫氏編集)をひもとくながら記述することにします。

昭和30年頃は「もはや戦後ではない」などともいわれましたが、故郷を出て上京し勉学する学生にとっては、まだまだ食糧不足と極度の下宿不足が続く不便な時代でありました。

そのような状況をかかわり、思われた衆議院議員で中央大学教授であった稲葉修先生が郷土の関係者に発議され、昭和30年9月「岩船学生寮建設委員会」を設置することが決定されました。同年4月中旬、習志野市谷津町五丁目の48坪の土地と10坪の建物最寄りのと認められました。物件の購入手続きが進むなかで、5月1日、各市町村、二高等学校、同窓会、PTA等関係者が集って「岩船学生寮建設委員会」が正式に発足し、委員長に村上高等学校校長森房三郎氏が就任されました。同月10日から各市町村長、議長をはじめ各位に寄付をおおぐ活動が開始されましたが、寄せられた金額は開寮時には総額90万円近くのはず、中には恩給を受けている老人の方からのものもあったそうです。同年6月11日、建設委員会により寮運営委員が選出され、寮長に稲葉代議士、寮監に益子一郎氏が決定し、寮則も定められました。

そして、昭和31年9月9日、第一期寮生13名により開寮式が行なわれました。以来開寮までの16年間に165名(名簿による)の学生がそれぞれの青春を過ごしていったのです。寮生は、東京地区に勉学する学生を主にし、岩船都市出身者やその縁故者で運営委員会が認める者から構成されており、前記の寮誌「わふね」に載っている益子寮監による寮生寸評や開寮式における稲葉寮長の挨拶にあるように、寮生の中には寮監にすいぶん手を焼かせた面々もいたようです。これもこれも青春の一ページであり

あるという。

好きな言葉は「先輩に対しその礼厚く同輩切瑳直言敢えて憚らず、後輩に処して、隔つるところなし」。

かつて籍を置いた岩船学生寮に掲額の先学達の子弟教育にかけた精神は、今も脈々と受け継がれている。

多摩市に奥様と子女の三人暮し。村上・寺町出身。六五才。(〇)

寮運営は、運営委員会の方針により、寮監の補導監督のもとに寮生の自治で行なわれておりましたが、その基本となっていたのは次に掲げ「同人心得」でありました。

「一、先輩に対し其礼厚く同輩切瑳直言敢て憚らず後輩に處して隔つところなし 一、青雲の大志固く敢て誘惑を斥け而して潤澤自在奮飛魚躍るが如し 一、敬虔脚下を照顧し奇を取り異を抜き凡を以て秀とし業に勵んで心移ることなし 一、現実即して理想に生き小我を出でて大我に帰し祖國を基として世界に和す」

こうして160名以上の学生達の春秋が送られていった訳ですが、寮のたゞずまいは、前述のように敷地が50坪近くあり数人がキャッチボールができるくらいのスペースの庭があるほど広いものでした。建物は、決して新しいとはいえない木造3階の和洋折衷で、1、2階が居室等、3階に二段ベッドが20以上設けてあり、構造で監一家の居室となっていた別棟といった構造でした。

それから16年、学生をとりまく環境もすつかり変り、建物の老朽化もはげしく(昭和45年消防から危険建築物に認定) なってきたため、昭和45年6月25日臨時運営委員会において寮の閉鎖と財産を処分することが決定され、諸々の手続きを経て閉寮され、同年12月5日閉寮式が行なわれることとなったのです。

寮生活、寮生面々のエピソードを数え挙げればきりがありませんが、そのいついかなる時にも益子寮監一家の姿があり、寮生たちは50年経った今も敬慕と懐かしさの念を禁じ得ないのです。そこで、最後になってしましますが、稲葉寮長の閉寮式での挨拶から一節を次に記します。

「益子一郎君夫妻、殊に奥さんには、雑物の寮生もないわけではなかったが、よく真夜中にも飯を食わせてくれたり、面倒をみていただき、大変ご苦労だったと思います。当時小さかった三人の娘さんも、両親の善良な性格を受けついで、寮生に家庭的な良い雰囲気を与え、お互いにその成長に貢献していただいたことを、深く感謝いたします。」 その稲葉寮長も益子寮監も、今はおられない。合掌

益田紀雄(新制12回)

思い出エッセー

あの日 あのころ つまじぶん

時代の転換期の学生生活

長郷邦男 (旧中44回卒)



私が村上中学に学んだのは昭和十七年から四年間です。1クラス約50人編成の3クラスで、岩船郡の中心校として郡内のほか北蒲、山形県からの入学者でしたが、大東亜戦争下のこととて卒業するまでには疎開による編入者が次第に増えました。

当時、中学へ進学する者は多分にその出身小学のエリアト意識をもって進学してきた人達で生徒の自宅には校章の焼判の入った名札を張り、親達もそういう意識をもっておられたのではと考えられます。先生方もその事をもって小学校時の子ども意識から早く脱却して勉強するようにと口癖のようにいっておられました。

小学以来ずっと戦争が続いていたことで、もの心ついてから平和ということの認識のない時代でしたが、まだ教科書なども手に入り、国漢英数理地歴、それに正課として柔・剣道、軍事教練と多彩で、これが中学かという感を私は強く持ちました。当時、学期ごとに中間試験と本試験とあり、単位などという制度はなく成績は点数で評価されました。旺文社の「『の総合的研究』」豆単、蛭雪時代や、小野圭二郎(オノケ)の英単、岩切の数学、ETC、など懐かしい参考書などが想い出されます。それに三文(サンモン)、ご存知ですか?またこの年は、ヒトラの有名な「我が闘争」の訳本が出版されました。

秋の大運動会、瀬波海岸での遠泳大会、水泳大会、温泉往復のマラソン大会、夏休みの飯盒炊さん、弁論大会等々、そろそろ青春時代に入った若者には平和の認識がないままに又楽しい思い出があります。上級生が柔剣道や体操の県下中等校対抗試合に先立ち、応援歌の練習も頻繁に行われ、そのような機会には上級生からは「説教」とか「鉄拳制裁」などという現在の「いじめ」とは異つた下級生指導?があり競々としたものでした。

しかし戦争奇烈、次第にそれ等もなくなり、学帽は戦闘帽に白線、長男以外の生徒に予科練志願の勸誘があったり、上級生は学業を離れて軍需工場に学

徒勤労報国隊として動員され村を上を離れて行かれました。私の学年も19年半ばから郡内各地に分散して勤労奉仕に出、授業は途絶えました。私の上の学年からそれまでの中学5年の修業年限が4年とされ、昭和20年3月には先輩の42、43回生が同時に卒業されるという事態になりました。その年の8月敗戦、今度は我々の学年は4年で卒業してもよろしいし5年へ行つてもよいという、今考えると一方的におかしな措置をされたものです。ですから私達の学年は同時に入学して卒業は2年に亘り、更に新制高校生もいたということ、勤労動員で配属地がばらばらであったこと、部活動等もなく、疎開転入者も多かったことなどで他の学年に比べて残念ながらもまごまごが弱いような気がします。卒業写真なども見当りません。

敗戦で学校へ帰ってみると、当時校舎へ疎開を予定されていた横河電機の工作機械やら半製品などが校舎内に搬入されていて、この整理。一入敗戦を感じたのは、軍事教練用の三八式歩兵銃や銃剣を進駐軍に提出のため、新発田へ運んだことです。

20年10月、米占領軍が瀬波海岸に大挙して上陸、毎日のように兵員車両物資が陸揚げされ、轟音を立てて村を通り抜け新潟へ向いました。その余暇?に若い将校が村中学校舎へバスケットボールをしにやってきました。文字通り昨日の敵です。しかし、長年の戦争から解放された安堵感のようなものが優先していたのでしょう。相手も若い、言葉も殆ど通じないのに混乱もわだかまりもなく明るい雰囲気です。平和の有難さを感じました。

あれからもう58年、中学生時代は社会の影響を受けながらその人固有の人間性が形成され発揮され始める時代ではないでしょうか。その時代に我々の学年の前後の生徒は学制に翻弄された皇国史観からの転換の時期を生きてきました。各自、現在の社会情勢をどう見るかは興味のあるところです。

「久しき昔」と魔法の笛

野中千枝子 (新制6回卒)

語れめでし真心 久しき昔の
歌えゆかし調べを 過ぎし昔の:

卒業してから半世紀。二度と再び訪づれるチャンスがなかった、あの懐



かしい村高の、音楽室。毎放課後には必ず集まって、声も枯れよとばかりに歌いまくった名曲の数々。そして、若く、心美しかった音楽部員の面々。

五十年も経つてしまった今日も明日も、夕べに朝に、遠く離れた東京から、ただ一本の笛の音色に心を乗せて、私は帰って行くのです。あの古びた校舎に、敗戦間もない昭和二十六年春、大伯父や父の学んだ誇り高き旧制村上中学、現在村上高校に私は入学しました。女子も入れるようになってから、わずかに二年目のことです。

当時、女子は一クラスに八人のみ。三年生は男子だけ、旧制色の濃い先輩学生の、高足駄ばき、破帽の雰囲気の中にありながらも、のびのびと学業生活を送れた事は、外見のバンカラとは裏腹に、いかに先輩方が心やさしかったことか、と今思い出しても、本当に心温まるものがあります。まだそれ程の受験戦争も始まらず、高度成長前夜、といった、貧しいながらも少しの間の牧歌的な時代だったことが幸いしたのでしょうか。

クラブは、当時盛況の音楽部に参加、音楽部といっても、物の無い時代ですから、自前の声で歌うしありません。あるのはグラランドピアノが一台だけ。音楽の斉藤菊巳先生が一人大奮闘で、指導、伴奏、指揮、選曲して下さいました。低音の良く効いた混声合唱でした。地方なので、まだジャズの洗礼もなく曲はクラシックの世界名曲多数。今思うに、歌で古今の世界一周をしていたようなもので、時にはシューベルトの歌曲などは原語のまま、ドイツ語ですから、意味も判らずに丸暗記です。その他、選択科目での音楽の授業では、音楽理論、音楽史、名曲鑑賞など、一通りの教養はしっかり教えていただいたと思います。

しかしながら、上京して化学系に進学、その後も、この都会になんとか根付こうと努力しているうちに、いつしか音楽どころではなくなっていた私。ようやく一息ついたころには、声が出なくなっていた。これじゃまるで歌を忘れたカナリヤ状態。なんとか懐かしい歌に遊ばせてもらいたい一心で、ふと思いついたのがフルートでした。最初のころは、私が笛を手にした途端、愛犬すら逃げ出す。

でも、石の上にも三年、今ではひと吹きでタイムスリップ。あの懐かしい部室へ。そして洋楽の故郷、世界へ。世紀・民族を越えて。どなたでも、音楽の翼に乗って空を飛べるのです。

私にとっては、村高音楽部は、五十年の時を経て、一本の小さな魔法の笛に変身したのでした。

—— 歌の翼に汝れをのせて ——

—— 連れゆかんガンジス 流るる調べ ——

三面川の鮎を食べる会

市岡貞雄 (新制8回卒)



私は平成十年三月、三十八年間勤めていた皇居半蔵門前の「株式会社東條会館」を定年退職いたしました。

同年三月六日「東京村上納友会」一〇〇周年大会が東條会館に於いて開かれ、会員、ご来賓等一〇〇名を超える方々のご出席をいただき、私は事務局長として参加いたしました。

東京村上納友会は、郷土の向上発展を目的とする村上出身者およびその縁故者にして、東京都並びに近県に在住する者で組織する、とあります。この会で例年九月上旬、私が釣ってきた鮎を食べていただくのが表題の趣旨です。

さて、三面川の鮎の解禁は七月五日、終期はおおむね九月三十日頃です。鮎とお米は水によるところが非常に大であります。川の水質の良い三面川流域のお米がおいしく、川石に生える良質の水垢を食べている三面川の鮎が美味なのは当然です。

私は、肴町にあった実家から歩いて十分位の三面川で、十才頃から「ゴロ掛」で鮎を釣りました。場所は今の下渡大橋と瀬波橋の間で岩神の下流にあつた「七番の瀬」です。

面白いもので、二十才頃、三面川鮎釣大会があり、この瀬でゴロ掛で優勝しました(大物賞も)。今は鮎の捕獲場等があり、護岸もされて昔のおもかげは全くありません。ところが何故か、ここ数年はこの辺が私の主な漁場となっています。

私の釣法はゴロ掛と友釣りを併用して、数を釣るようになっています。宿は村上駅前前の石田屋で、預けである自転車三日間ずつ三回出漁し、釣った鮎は冷凍して持って帰り、大・中は塩焼、小は天ぷらにし、又昨年から自家製の甘露煮も加えて、例会場の根津の「幸楽」に於いて「三面川の鮎」を皆さんに供しています。

最後に稲葉修先生について述べたいと存じます。稲葉修先生の著書「鮎釣り海釣り」にこんな文が

あります。「市岡君は、元来石神あたりでゴロ掛ばかりやっていたらしいが、私と一緒に各地の河川を釣って歩くようになったのである。友釣りは私のほうが遙かに先輩であるわけだが、少年の頃毎日三面で鍛えた腕前があるから、鮎の習性を熟知しているらしく、友釣りも今では私など到底およびなくなつた。彼とは各県の河川を釣りにまわつた」とあります。そんな訳で、平成十年八月、第三十四回三浦川鮎釣大会第六回稲葉修記念杯シニア(六十才以上)部門優勝は、この年が先生の七回忌にあたりましたので感慨深いものがありました。

月日の経つのは早いもので今年が先生の十三回忌となります。鮎釣りという縁で結ばれた思い出を一生大事にしていきたいと思います。

村高に咲く青春の花

菅原和士(新制12回卒)



「2枚の平行の紙の間に空気を吹くと、紙は引き合うか反発するか」。村高入試問題の一つだった。家で試し、答えが間違いと分り、「ダメだ」と諦めていたが「桜咲く」の知らせを受けた。自転車通学で、時々追い越す歩きの女高生に挨拶する術も知らず、その悔い今に残る。詰襟の男子生徒の凛々さと、紺に白線の身なりは清楚の象徴、女生徒。6歳から母子家庭で育つた私は天照大神を崇敬するに似た女尊思想の傾向。女生徒の背中は誠実、真面目、優しさと美しさの鏡。とは言っても、言葉交わす機会も無ければ勇気もない。男子生徒とて大同小異。皆「青春の花」のよう。早々に化学クラブに入り、2年先輩の森昭子さんが実験室を案内して下さつた。先輩の化学に対する情熱と化学薬品。一瞬、「僕も材料科学を」と。2年の3学期は風邪引き通しで、関西修学旅行はうたかたと消えた。

成人を迎え、川原の枯れ草に仰向けば、燦々と輝く日の光。せせらぎに重なる村上の音。まだ十代の心で言葉を並べると、「とこしえの青空満てり 日の光 彼方に咲ける 青春の花」「科学者」と夢見ても、その実現に十年はかかる。先立つものが無ければ焦灼されず。事はじめ。巫女さんから、西へ行けば嫁さんが。母からはなむけ言葉「アメリカへ」。まずは、半ば迄の長旅路。晴のち曇り、時々小雨。胸突き八丁で土砂降りに。着いてみれば奈良

だった。「西国お伽」を期待して、住めば奈良市は尼寺の町、大きい池の側だった。真ん中あたりに浮ぶ瓢箪の島。神代の巫女さんを偲ばせるお姫様が眠っている。まずは花咲く尼寺で説教を。心身新たに西へ赴くと、浪速しぐれで傘差し掛けてくれたうら若き女に出会う。大阪慕情で私の妻となつた人。と同時に、ハーバード学派の中国系科学者から「奨学金を世話する。米国にこないか」と、二重のお伽。アメリカでの修業、アメリカ航空宇宙局での研究生活など、滞米10年目に帰国。住んだ所が奈良で、またの縁。こうして奈良は第二の故郷に。いま、関東の大学で超伝導、太陽電池、電気自動車など堅そうだが人に優しい工学と英語を教鞭。教科書3冊執筆済んで、4月から出版の運び。カバーは紺地に三本白線六角形。「六」は化学構造、村高・六組掛け言葉。その中から、日の光、燦々と輝けば、「村上の 木造学舎 遠くなり、青春の花 鮮やかなのに」の心境に。高校入試で間違つた「理科」、利那にひらめいた「材料科学」、苦手の「英語」、行けなかつた「奈良」。こんな青春「虚像」、「実像」となり、いま生業の種になっている。異国の恩師も祖国に戻り、国家元首の重臣・科学技術の統帥に。遙かに辿る、いつか来た道。「思えば、いと疾し、この年月」と、恩師の方々を偲ぶ。もしかして、中学一年の時亡くなられた小学恩師・宮下源次郎先生(2年先輩の島田(宮下) 志津さんの尊父)が道しるべでは。ふと思ふ、還暦過ぎて尚のこと。

(日本工業大学 教授)

故郷の村上に感謝

佐藤 勝(新制14回卒)



昨年から同窓会関東支部の副会長という大任仰せつかつております。先輩の幹事の皆様方とともに今後の会の運営に努力していく所存です。宜しくご協力ご支援の程お願い致します。本年もまもなく支部総会と懇親会が開催されますが、沢山のご参加を心からお待ち致しております。

昭和三十七年卒業の我々14回生も昨年から今年にかけて、全員が還暦を迎えてしまいました。今まで東京や地元でそれぞれ同級会など、持たれていたのですが還暦の年ということで、昨年10月には瀬波温泉大観荘にて合同の同期会が開催され、130名参

加という盛大なものとなりました。村高卒業以来40数年ぶりに顔を合わせる仲間も多い中、「光陰矢の如し」学生時代のことがついでこの前のことのように想い出され、お互い60歳を迎える事に信じられないという気持ちで一一杯でした。

旅館の露天風呂から眺められた日本海に落ちる大きく真赤な夕陽は昔のとおりでしたが、砂浜はずっかり小さくなり、あの邪魔なテトラポットはなかったね、など昔話に大いに花が咲いたものです。因みに大観荘の佐藤久也社長も同期生で今回の同級会では何かと配慮を下さり改めて同期生の有難を感じました。

結果論かも知れませんが私達の世代、昭和16年から20年くらいに生まれた人たちが一番恵まれていてという話があります。確かに射ていることが多く納得できるものです。戦中戦後の混乱期は幼なすぎで特別苦労をした認識もなく過すことが出来、その後の復興期には貧しく地味な生活ながらも、塾に通う事もなく、恵まれた自然の中で海へ山へと遊び廻ることが出来た少年時代、そして東京オリンピックを機に急成長を見せた日本の高度成長時代に一番無理のきく青年・壮年時代を社会人として過ごして来ました。苦労もあつたのですが、少なからず努力が結果に結びつき、夢が一つ一つ実現されていく本当に良い時代だったと思えます。

以前、街の飲み屋さんでこんな体験をしたことがあります。偶然3組の客が一緒となり、一組は元氣な70代後半、そして私達50代後半、もう一組は20代後半でした。カウンター席だったため話が一緒になり、いろんな話から、「私達は戦争を経験する事もなく、先輩達の苦労のお陰で今の幸せな日本で暮せる」感謝の気持ちを言う、しかし若者達ほとんどでもないと言います。「先輩達は良いが、今の我々のお先は真つ暗ですよ」と言う。厳しい企業環境や国の財政問題など、酒の席でお互い言いたいことを言い合いましたが、確かに今の若者達の気持ちが解らないでもない今の世の中です。

しかし何事も上を見れば足りがなく、むしろ下を見てお陰さまでという感謝の気持ちを持つと何かが湧いてきて、何かやれそうな気持ちになります。まだまだ平和な日本、そして素晴らしい同窓の仲間と故郷村上を持ったことに「感謝」したい。

村高剣道部の思い出

尾崎 茂(新制15回卒)

私が村高を卒業したのは、昭和三十八年の春です。今から四十年前のことになります。同窓会関東支部からの原稿依頼があり、当時の資料を押入れで引っぱり出し整理していると、当時のいろいろな事が走馬燈のように思い出されます。高校時代で一番の思い出といえば、勉強よりも(?)やはりクラブ活動の事でしょうか。私は入学と同時に一年先輩のEさんからさそわれて剣道部に入りました。当時剣道部の練習場は、古い校舎の「講堂」と呼ばれる場所を柔道部と半々ずつ使っていましたから練習場所には比較的恵まれていたと思います。顧問は五十嵐一男先生で、先生の真剣な指導にもかかわらず、どの大会でも一、二回負けという状況でした。そんな時に、昭和三十七年四月、私達が三年生の時に、田辺豊盛重先生が着任されました。翌年の昭和三十九年には、村高の体育館が新潟国体の剣道会場に指定されていて、田辺先生は教諭の仕事と、国体の準備にお忙しいなか、熱心に私達を御指導してくださいました。汗が目に入って、対戦相手の姿がぼやけて見えた夏の合宿。寒さのために胴着がなかなか着にくかつた冬の寒稽古。胴打ちを受けそこなつて肘にくらつた竹刀のあの痛み。今になってはどれも懐かしい思い出ばかりであります。

その後、昭和五十一年には、田辺先生を囲む会「ともえ会」が発足。昭和五十七年には、先生が村高着任以来コツコツと書きためられた、剣道部の試合経過や戦評の記録が残されていることが話題になり、その後、後輩達の手により「県立村上高等学校剣道部の二十年の歩み」―田辺豊盛重先生と共に―を発刊。又、今でも「ともえ会」の例会を毎年一回開き、先輩、後輩の交流をはかっております。

還暦を迎えた今日、竹刀を握ることはめつたにありませんが、村高剣道部で培つた、根性、集中心などは、その後の私の生活にもずいぶん役立っていると思えます。

その後、田辺先生も退職なされ、現在悠々自適の生活をおくられておられるとのこと。こころばらく先生にはお目にかかつてはおりませんが、益々の御健康と御発展をお祈りするばかりであります。

ふるさと情報



贈って喜ばれ、もらってうれしい村上茶
富士美園では懐かしい故郷の味を
 お届けしています

故郷を離れ活躍中の皆様、ふるさと村上のお茶を飲みませんか。ご家庭用はもちろん、お世話になった方への贈物にも最適、ぜひ北限の茶処・村上茶をご利用下さい。

富士美園ではいま送料無料(お買い上げ三千円以上)でお届けしています。村上茶は日照時間が短く、寒暖の差が大きい気象条件から「やわらかくひきしまった味と香り」が特徴で、その味の良さは高く評価されています。

ご贈答向き	玉露煎茶 缶入り2本セット	5,000円
	煎茶 缶入り3本セット	4,500円
	玉露煎茶 袋入り2本セット	3,000円
	煎茶単品	2,000円~
ご家庭向き	煎茶 袋入り3本セット	4,500円
	番茶200g入り 3本セット	3,000円
	ほうじ茶200g入り 3本セット	3,000円

役員一覧

役職	氏名	卒業回
名誉会長	小川景士	旧制40回
顧問	長郷邦男	旧制44回
顧問	渡辺孝教	新制5回
会長	本間勝治	新制9回
副会長	林節子	新制7回
副会長	鈴木亮	新制9回
副会長	益田紀雄	新制12回
副会長	佐藤勝	新制14回
事務局長	長谷川康夫	新制10回
幹事	齊藤喜英	旧制35回
幹事	大平金一	旧制36回
幹事	鈴木喜一	旧制39回
幹事	富樫利男	旧制40回
幹事	岩間昌昭	旧制42回
幹事	近五郎	旧制46回
幹事	船山泰三	旧制46回
幹事	木村一昭	新制1回
幹事	川上孝	新制2回
幹事	小田正二	新制3回
幹事	川村正越	新制4回
幹事	村川慶子	新制5回
幹事	湯浅素子	新制6回
幹事	中野千枝子	新制6回
幹事	野中廣	新制6回
幹事	荒木岩雄	新制7回
幹事	本間實	新制7回
幹事	斎藤陽一	新制7回
幹事	小田貞雄	新制8回
幹事	市岡克子	新制8回
幹事	木藤菊栄	新制8回
幹事	中野悟朗	新制8回
幹事	小池洋子	新制9回
幹事	関根ミチ	新制10回
幹事	稲葉喜重	新制11回
幹事	平山進	新制12回
幹事	大滝修	新制13回
幹事	前田洋二	新制13回
幹事	小野繁	新制13回
幹事	稲葉真樹子	新制14回
幹事	尾崎茂	新制15回
幹事	川村稔	新制16回
幹事	山本宏平	新制17回
幹事	秋山芳行	新制19回
幹事	佐藤陽三	新制20回
幹事	高橋国栄	新制20回
幹事	鳥屋英二	新制23回
幹事	永井賢吉	新制26回
幹事	中村英之	新制29回
幹事	相馬章	新制30回
幹事	丹田安夫	新制30回
幹事	佐藤康則	新制30回
幹事	本間恵美子	新制31回
幹事	篠崎泉	新制34回
幹事	前田格	新制36回

*ご予算に合わせ、いかようにもアレンジ出来しますのでリーダイヤル又はFAXで遠慮なくご相談下さい

*別途消費税を申し受けます。送料はお買上げ三千円以上の場合無料でお送りしています

*お支払は、同封する郵便振替用紙にてお払込み下さい

*ご希望の方には詳しいパンフレットお送りいたします

これであなたもお茶通になれる

玉露(ぎょくろ) 新芽が出てから茶園に覆いをかけて生育させ、新芽のみを摘み取る。強い蒸気でさつと蒸しあげてつくる。緑色濃く香味高く、お茶の最高級種。

緑茶(煎茶) 五月上旬の最初に摘み取る一番茶。葉を蒸して乾燥したもので日本茶といえればこれをさす。

番茶 六月以後の葉を茎とともに刈り取って製茶する。廉価で特有の風味を持ち、ほうじ茶、玄米茶等にも加工。

富士美園

店主 飯島 久 (新制十八回卒)

村上市長井町四一九

電話・FAX 〇二五四(五二)二七二六
 フリーダイヤル 〇二二〇一五二二二七二六
 ホームページ <http://www.fujimien.jp/>

*むらこ紙で見たと違って下さい。
 何かいいことがあります。

平成15年度維持会費拠出者 (順不動 敬称略)

16年3月10日現在

旧制31回	貝井内村	一郎	3回	森野相馬	田村小庄	4回	享清可正	平広人吾三	5回	石田渡青	孝美	8回	大滝伊赤	正国	10回	小野丹野	13回	久高橋	16回	和佐原	17回	川安	18回	島井	19回	也八
34回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
35回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
36回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
37回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
38回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
39回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
40回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
41回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
42回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
43回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
44回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
46回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
47回	沼伊内村	哲三	4回	野木相馬	川村西内	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八
新制1回	菊地村	武昭	2回	米内利忠	正洋	3回	享清可正	平広人吾三	4回	石田渡青	孝美	7回	大滝伊赤	正国	9回	小野丹野	12回	久高橋	15回	和佐原	18回	川安	19回	島井	20回	也八
2回	米内利忠	正洋	3回	享清可正	平広人吾三	4回	享清可正	平広人吾三	5回	石田渡青	孝美	8回	大滝伊赤	正国	10回	小野丹野	13回	久高橋	16回	和佐原	19回	川安	20回	島井	21回	也八
3回	米内利忠	正洋	4回	享清可正	平広人吾三	5回	享清可正	平広人吾三	6回	石田渡青	孝美	9回	大滝伊赤	正国	11回	小野丹野	14回	久高橋	17回	和佐原	20回	川安	21回	島井	22回	也八

●維持会費のご協力をお願いします

同窓会の活動運営を支える唯一の財源として、皆様に年間1口(2千円)以上の維持会費をお願いしています。なにとぞ添付振込用紙にてご協力をお願いいたします。昨年度は多くの方々からご協力を賜わり、ありがとうございます。本年度もよろしくご協力をお願いします。